

高瀬川だより

NPO法人京都高瀬川繁栄会報
編集人 田村佐起三

〒六〇四一八〇〇一
京都市中京区木屋町通三条上ル
電話 (〇七五) 二二二二・二八二八
弊NPOは「憲法を改正、経済力と軍事力の両面で健全な国体を支える国家」を求めます。

《訃報が続いた昨年》

私たちの孫の父・今村愛作(今村酸素代表)が一月に、三男・起三郎(USJ企画室勤務)が七月に他界しました。十一月には細木数子さんと瀬戸内寂聴さんの訃報が続いて舞い込み驚きました。細木さんとは木屋町の蘭さんで出会いました。いつも一方的に話され、身を乗り出して「君の未来は素晴らしい」と占って戴きました。

瀬戸内さんは中学の担任天納傳中先生の専門仏教音楽「声明」のお弟子さんでした。先生発案の作法衣を納入に寂庵に何回もお伺い、インド等諸外国訪問時のちりめん略礼服や洋服を毎回別注戴きました。新刊の本は何時もある名前を直筆戴き恐れ入っていました。一番最初の時に妻の名前の漢字を間違われ、新しい本に書き直されたのには衝撃を受けました。瀬戸内さんは凄い人だと！また豪快な健啖家で、美味しいものをたくさん教えて戴きました。

京都文化博物館 《挑む浮世絵 國芳から芳年へ》

2月26日～4月10日

歌川國芳(1797-1861)は旺盛な好奇心と柔軟な発想、豊かな表現力を武器として武者絵や戯画に新機軸を打ち出し、幕末にいたって浮世絵のさらなる活性化につなげた浮世絵師です。今日では奇想の絵師としてその人気は定着してきています。親分肌國芳を慕って多くの弟子が集まりましたが、なかでも最後の浮世絵師と称される月岡芳年(1839-192)が特筆されます。國芳の奇想をよく受け継ぎ、更に和洋の融合を推し進めた彼の作品は近年再び高く評されるようになってきました。本展では國芳、芳年の他、芳年とともに國芳門下の双璧とされた落合芳幾(1833-1904)などにもスポットを当て、國芳が切り開いたさまざまな新しな面を弟子たちがいかに継承、変化させていったのかを約150点の作品と資料によって紹介します。

幕末、激動する時代のうねりを生き、描き、人々を魅了し続けた「芳」の系譜。怖い絵も華やかな絵も、実は悲しい絵も、ぼつと目をひく表現が彼らの得意技です。人々の嗜好に合わせて最後まで新しい画題と表現に挑み続けた國芳を領袖とする「芳ファミリー」の活躍をご覧ください。

《年が改まって》

常葉臺住職 今小路覚真

歳を重ねることは、現実から逃れられない厳しさを教えられることでもあります。年末から年始にかけては、大半が少年時代の思い出にふけるばかりです。母親が台所に一杯の湯気をこもらせておせちの準備におおわらわでありながら、大晦日には美容室に行き、こざっぱりとした髪形に整えていました。わたしは寒風をものともせず、むしろ西風を頼りにした風揚げに熱中し、お年玉の袋を開ける緊張感に胸躍らせていました。新しい年を迎えた、過ぎた一年の反省、来るべき一年への希望などは、いくら想い出しても浮かんできません。ただ一日一日の通過点の少し特異な雰囲気や周りにただよい、その中を何気なく通り過ぎてきただけでした。しかし、近年はこの時期のこの時間の過ごし方をあと何回できるのだろうか、見えない時間を計るようになりました。

宗教法人花鳥寺 土口哲光住職の説法

《悪いことするな》

仏教で一口で説かれるのが、「悪いことを作すこと莫かれ、善いことをせよ、である」。諸悪莫作衆善奉行」と言う。次に、「自ら其の心を浄めよ、これが諸仏の教えなり」と、同じく経文は「自浄其意是諸仏教」で終わる。この「悪をつつしめ、善をさえ行つていけば身も心も浄くなるもので、これが仏たちの説かれた教えである」のは法句経という經典の中にある「七仏通誡」。仏教徒の誡めになる。中国の唐で道林禪師が説法すると詩人、白居易(白樂天)が、「悪いことをするな」バカなことを、そんなことなら三歳の子供でも知っている」と反発。禪師は「三歳の童子が分かっている、八十歳の老人でも、それを実践をした生きかたはできていない」と返した。

季節の家庭料理

田村真紀

《二月 長葱とベーコンの白味噌グラタン》

《作り方・四人分》

長葱三本(白い部分のみ)・ベーコン二百グラム・白ワイン大匙四・バター三十グラム・薄力粉二十グラム・牛乳三百ml・白味噌大匙四(牛乳百mlを加え溶きのばす)・ピザ用チーズ百二十グラム
長葱とベーコンは長さ3cmに切りフライパンで焼き色をつけ、ワインを加える。アルコールを飛ばし蓋をして弱火にし、水分が無くなるまで蒸し焼きにする。鍋にバターを入れ中火にかけ薄力粉を加え粉っぽさが無くなるまで木べらでよく混ぜる。牛乳を加えダマにならないよう手早く混ぜ、白味噌も加え混ぜ合わせてソースを作る。耐熱皿に長葱・ベーコンを入れソースをかけ、チーズを散らし二百五十度に熱したオーブンで約十分焼く。

つれづれの記

山崎辰巳

《日本の美意識に心よせて》

正月も松の内が明けて二月後半になると、なぜか春の気配を感じ、心とらぐのは、日本人固有の心情なのだろうか。この時期になると必ず二つの和歌が想い出される。ひとつは、「東風吹かば匂ひおこせよ梅の花 あるじなしとて春を忘るな」 学問の神様と奉られる菅原道真が大宰府へ左遷される時、愛する梅の木に寄せて詠んだ歌で、春の東風が吹いたなら、その香りを私のもとに送っておくれ梅の花よ、主がいなくても咲き時の春を忘れるなよと。あと一つは「願わくは花の下にて春死なんその如月の望月の頃」 鎌倉時代の僧侶・歌人の西行法師が、願い叶うなら、如月(旧暦二月現在)の三月、満月の頃、桜の下で死にたいもの、と詠んだ。混沌とする現代。時には梅や桜を愛でて、日本人の美意識に触れたいものだ。